

---

CAR LOVE LETTER 「APOLLO13」

YAS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CAR LOVE LETTER 「APOLLO13」

### 【コード】

N8941H

### 【作者名】

YAS

### 【あらすじ】

渋滞にはまってしまった主人公。なにやら落ち着きが無いようだが・・・？(テーマ車種：トヨタプリウス)(NHW20)

(前書き)

車と人が織り成すストーリー。車は工業製品だけれども、ただの機械ではない。

貴方も、そんな感覚を持ったことはありませんか？

そんな感覚を「CAR LOVE LETTER」と呼び、短編で綴りたいと思います。

まずい。これはまた非常にまずい。

今私は高速道路を走っている。予定ではもうこんな時間にはバラエティ番組でも観ながらビールを飲んでるはずだった。

しかし私の眼前にはお笑い芸人達の繰り広げる馬鹿ばかりしい体を張った企画ではなく、赤いランプの長蛇の列が並んでいる。

そつだ。今この道路はもの凄い渋滞なのだ。

もう一時間位はこんな状態だ。妻も子供も動かない車列に辟易して会話も途切れて陰湿な空気が車内を取り巻いているのだが、私は実はそれどころではない。

まずい。これはまた非常にまずい。

私は無意識に、指でハンドルをトントントントンと叩いていたようだ。

それに妻が気付き、苛立ちを込めてこう言ってきた。

「ちょっとそれやめてよ。どうしたの、さっきから。」

打ち明けるべきが一瞬迷ったが、いずれ話さなければならなくなるかも知れない。ならば、今打ち明けてしまおう。

「……ガソリンが、無いんだ。」

妻は眉間にシワを寄せ、ええ？と聞き返す。  
だから、ガソリンが無いんだよ。もう給油しなければかなりまずい  
状況なんだ。今すぐ動けなくなってもおかしくないんだよ。

だってこの車、ハイブリッドでしょ？と妻は言うが、ハイブリッド  
だからってガソリンが要らない訳じゃない。  
普通の車に比べて減りが少ないと言うだけだ。

しかし失敗だった。前のサービスエリアでガソリンを入れておくべ  
きだったんだ。

以前、西日本支社に出張した時に、本社から支社までの往復を無給  
油で余裕を持って走りきった私のプリウスだ。今回も十分余裕を持  
って帰宅出来るはずだったのだが、この渋滞は想定外だった。

どうもエンジンは走る為と言うよりも、バッテリーの充電の為に動い  
ている様な気がした。

そうか、渋滞をノロノロとモーターで走ってバッテリーを使っている  
から、チヨコチヨコエンジンがかかっているのか。

ならばバッテリーを節約すれば、サービスエリアまでのあと5キロを  
なんとかしのげるのではないか。

完全に電源を落としたいのだが、渋滞の車列は牛歩ではあるが進ん  
でいる。そういう訳には行かない。

私はまず、一番電力消費量が大きそうなヘッドランプを消した。  
どうせ渋滞だ。後続からも十分視認出来るであろう。私は次にスモ  
ールランプも消す事にした。

しかし依然としてエンジンはオン、オフを繰り返す。まだ何か無駄

な電気を使っているものが、節約出来るものがあるはずだ。

「ラジオ、止めるぞ。」

別にいいけど、と言った顔をして、しかし少々不安げな表情で妻は私の人差し指の動きを追った。

何だか、この人生のピンチとも言わなければならない状況を工夫を凝らして乗り切ろうとしている自分が、まるで映画の主人公の様に思えてきた。

そうだ。宇宙空間での事故で絶体絶命の危機に瀕しながらも、見事地球へ帰ってきたあの映画、アポロ13の様じゃないか。

私は自分がまるで、トム・ハンクスの演じるアポロ宇宙船の船長の様な、そんな気がしてきた。

私は、トム・ハンクスが遠くに見える地球を親指で隠す仕草をするワンシーンを思い出し、サービスエリアの案内表示を親指で隠したあと3キロ。

アポロが宇宙を漂っていた時、電力消費量は僅か豆電球一個程度まで抑えていたと言っじゃないか。

そんな状況で宇宙で生存し、地球へ帰って来たのだ。ここは地球だ。まだ減らせるモノがあるはずだ！

私はエアコンのスイッチに手を伸ばす。

それを見て妻が「ちょっと、何考えてるの！」と私を制止しようとする。

「ガソリンも、電気も・・・無いんだ！」私の頭の中はもうまるっきりトム・ハンクスだ。その一言にも、やけに力がこもる。

反面、かなり引き気味の妻。しかし私の気迫に負け、不満いっぱい  
の流し目で、もそもそとコートを羽織る。

今日は雪がちらつく真冬日だ。妻のあの目も分からんでもない。

エアコンが止まる。車内の暖かな風も止まってしまふ。窓から冷た  
い空気が流れてくる。私も息子もコートを着込む。

静寂に包まれたと同時に、モーターのキーンと言うノイズと、時折  
掛るエンジンの振動が私の不安をかきたてる。

もう少し。もう少しでサービスエリアなんだ。

あと一キロのところまで来ているんだ。

すると息子が、「お父さん、・・・トイレに行きたい。」と言って  
きた。またもや問題発生だ！

聞くとかかなり我慢していて、もう限界ギリギリまで来ていると言っ  
じゃないか！この寒さで助長されたか。

・・・そう言われると、私自身もずいぶん前からトイレを我慢して  
いた事に気付く。

まずい。これはまた非常にまずい。

絶体絶命か・・・！

しかしそう思った瞬間、目の前の車列が左にウィンカーをともし、  
するすると進んで行くじゃないか！

・・・サービスエリアだ！ランプに向かって前に行く車が数台、勢  
い良く飛び出して行く。

今だ！！

私はまるで、アポロが地球への軌道に乗るためにロケットを噴射するかの如く、今まで足を載せていただけのアクセルペダルをぐつと踏み込む。

モーターとエンジンが最後のパワーを振り絞り、サービスエリアまでの緩やかなランプを力強く駆け上がる。

ついに来た！サービスエリアだ！

しかもうまい具合に、トイレ前のスペースが空いているじゃないか！私にはその駐車スペースが、太平洋の着水ポイントさながらに思えた。

ついに私達は、苦難の道のりを制したのだ。

すぐさまトイレに駆け込む私達家族。生きた心地とはこの事だ。

ついでに夕食もこのサービスエリアで済ます事にした。

冷えきったこの体に、暖かいうどんが最高の贅沢だった。

まだ渋滞の車列は続いているが、ここまで来れば次のインターで降りて、下道を走ってもそう変わらないだろう。

私はほっとして、家路までの安全運転を心に誓う。さあ、帰ろう！

「お父さん、ガソリン！」

おっと、いけないいけない！

危うくまた、宇宙漂流してしまうところだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8941h/>

---

CAR LOVE LETTER 「APOLLO13」

2010年10月28日14時15分発行